ボランティア
女性教育情報センターだより
2021.3.26 発行 国立女性教育会館情報ボランティア NO.92

災害時における女性に対する暴力を根絶するために

～ 湯前(ゆのまえ)知子さんインタビュー ～

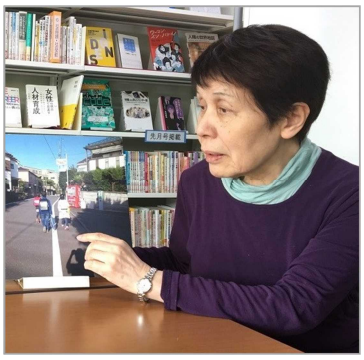
東日本大震災から 10 年。日本ではその後も大規模な自然災害が毎年のように起こり、防災、減災は現在喫緊の課題である。NWEC 情報センターでは 2019 年、「NWEC 災害文庫」を設置し、災害の記録・記憶の保存、今後の防災・減災の在り方についての資料や提言の収集に取り組んでいる。

私たち NWEC ボランティアは、震災の記憶を埋もれさせず、情報を発信し続けていくために、今号の特集にこの問題を取り上げることにし、湯前知子さんにインタビューをお願いした。湯前さんは、被災地での DV や性暴力について調査し、146 ページに及ぶ"**東日本大震災「災害・復興時における女性と子どもへの暴力」に関する調査報告書**"[http://risetogetherjp.org/?p=4879] を出した旧東日本大震災女性支援ネットワークのメンバーであり、夏の NWEC 男女共同参画推進フォーラムでも毎年ワークショップを行っている。

――この調査を行おうとしたきっかけはどのようなことでしょうか。

阪神淡路大震災の時性暴力の存在を知った方が、それについて声を上げた時、「被災地では性暴力などなかった。捏造だ」などと猛烈なバッシングを受けて沈黙を余儀なくされてしまいました。東日本大震災ではどうなのかと、客観的で信頼のおける調査の必要を痛感し、東日本大震災女性支援ネットワークの中で思いを共有したメンバーで調査チームをつくりました。

湯前さんプロフィール



NHK Web ニュース
2020 年 3 月 11 日掲載より

＜主な活動歴＞
1980 年代より性暴力や DV 問題に取り組む。NPO 法人フォトボイス・プロジェクト共同代表。

――調査に際してどのようなことに配慮なさいましたか。

震災が起きた年だったので被災の経験だけでも大変なのに、さらに心理的負担をおかけするような事を聞くような状況ではありませんでした。そこで、相談を受けた方、支援した方、診療した方などに調査票を配布して間接的であっても実態を把握しようとしたのです。調査票は約 900 票配布し、回収された回答を精査した結果 82 件の性暴力をはじめとする女性や子どもに対する暴力の事実が明らかになりました。

――報告書でその具体的な状況を知りましたが、実態は衝撃的でした。

私も回収票を読んで驚きと怒りで手が震えました。津波で夫を亡くし、着の身着のままで逃げてきた女性に対して援助物資と引き換えに避難所のリーダーが性行為を要求するなどということが起こるんだと。災害の際には単身女性やシングルマザーなど脆弱な立場の女性が標的にされてしまいがちです。

――調査の結果はウェブ上で公開されましたが反響はいかがでしたか。

全くと言っていいほど何もありませんでした。Web 上のものは、そこにアクセスした人しか見ないし、ページ数が多いのもネックになっていると思います。

――昨年(2020 年) 3 月に NHK でドキュメンタリー「埋もれた声 25 年の真実 ～災害時の性暴力～」が放送され大きな反響を呼びました。[6 月にも再放送]

テレビ番組の力は大きかったですね。女性プロデューサーが報告書を読んで、これで番組を創ろう！と取り組んでくれたのです。視聴者からもたくさんのコメントをいただきました※。こうして徐々に災害時の性暴力への関心が高まり、防災計画などにも少しずつ反映されるようになってきました。直近では、内閣府男女共同参画局が策定した「災害対応力を強化する女性の視点～男女共同参画の視点からの防災・復興ガイドライン～」（2020 年 5 月）に報告書の内容が取り上げられ反映されています。

※「日本でこんなことが起きているなんてショックだった」「知らなかった自分が恥ずかしい」「定期的な再放送を望む」などの声が多数寄せられた。（番組ホームページ https://www.nhk.or.jp/gendai/comment/0011/topic027.html）

――調査報告書には今後の課題としていくつかの提言があります。

被害を受けた人に注目が行きがちですが、加害者になってしまう人への働きかけ、啓発が不足しています。地位を利用して性暴力をふるう人はいうに及びませんが、性別分業意識や、男性優位を当然のこととして避難所運営をしたり、被害を過少評価して被害女性をさらに傷つけてしまったりするようなことがないようにしなければなりません。平時の暴力防止の努力とともに、避難所や仮設住宅の運営、防災会議、議会など、意思決定の場に女性が増えていくことが重要です。

――ジェンダーギャップ指数 121 位に表れているような日本社会が持つ根本的な差別構造を変えていく必要があるわけですね。どうもありがとうございました。

インタビューを終えて

インタビューは 2 月 19 日午後、Zoom で約 2 時間行われ、ボランティア側からは 3 名が参加しました。湯前さんの調査に対する厳密な姿勢、被災者や被災地に対する誠実な対応に感銘を受け、また豊富な活動のご経験にも触れて有意義な時間でした。 最後にフリートークになったとき、痴漢防止のポスターについて湯前さんがおっしゃった言葉が印象に残っています。昔は「痴漢に注意」「暗い夜道に気をつけよう」と、女性に呼び掛けていたけれど、今は「痴漢は犯罪です」と加害者に注意する言い方になっている、と。そうです、悪いのは夜道を歩く女性じゃないのですよね！湯前さん、お忙しいなか、本当にありがとうございました。 〔yk〕

湯前さんが共同代表を務める**フォトボイス・プロジェクト**とは？

2011 年 6 月から、被災した女性たちがその後の生活や地域の状況を写真に撮り、継続的に小グループで写真を観ながら語り合い、声（メッセージ）をつくる活動を福島県、宮城県、岩手県、広域避難の女性たちが暮らす東京などでサポートしている。

この活動の成果である**写真**と社会に発信したい**声**（メッセージ）は、一体であることが特徴である。小グループでの話し合いは、被災した女性たちが、それまでなかなか口に出すことができなかった思いを語り、参加者同士が共感や気づきを得る場である。同時に、展示やワークショップなどで被災体験、防災・復興の課題を記録・発信する活動の基となっている。〔af〕

《 湯前さんのお話 》

メンバーのおかれている状況は、被災体験が原発事故によるものなのか津波によるものなのか、その複合的なものか、福島県内に在住しているのか、広域避難しているのかによって違っています。津波の場合、防潮堤ができたり高台に新しい町ができたり、復興という名のもと見た目は変わってきました。復興は嬉しい反面、それに気持ちがついていかないということや、原発事故で戻らない、戻れない方たち、福島県内に在住している方たちも含め、喪失の痛み、苦しみがあるかとおもんぱかっています。

それでも自らの被災経験をもとに防災・復興への“提案”もしています。そうした届きにくく見過ごされがちな女性たちの声を、公的機関である NWEC のアーカイブ*で公開されていることは大きな意義があります。

フォトボイス・プロジェクト → http://photovoice.jp/

＜写真と声の例＞

安全と美観を兼ねた防潮堤

住民の反対を押し切って、
海水浴場の防潮堤が完成した。
横長の窓から海も見え、工夫する
大事さを知った。

良子

岩手県宮古市藤の川　2019 年 6 月 撮影

女性たちの<写真>と<声>はこちらで見ることができます

***NWEC 災害復興支援女性アーカイブ**　https://w-archive.nwec.jp/il/meta_pub/G0000337wd

NWEC と全国の女性関連施設等が連携し、女性の視点からの災害復興支援活動の記録を収集・保存

PhotoVoice Project Japan　https://photovoiceprojectjapan.zenfolio.com/

<声> は 日本語、および英訳（一部仏語訳）あり

NWEC ボランティアが見た被災地　～ビフォア、アフター、そして今～

同じ場所[福島県いわき市塩屋崎灯台 https://goo.gl/maps/sTN2eMR5EbDNoAuh9]から撮影した２枚の写真。灯台北側の薄磯地区は、きれいな遠浅の海が魅力の、細い道が入り組んだ風情あふれる町だった。しかし、3.11 の津波で殆ど消失。現在は、高い壁のような防潮堤（防災緑地）に守られた、まるで都会の新興住宅地のようにきっちりと四角く区画整理された町になっている。〔af〕

撮影　2002 年 10 月

2016 年 12 月

2020 年 3 月陸側からみた防潮堤

テーマ展示紹介(2021.1~3)

今、フェミニズム

～声を上げる、行動する、変える～

若い人たちの思いが結実した本２冊

フェミニズム、ジェンダー、差別、性的マイノリティ、仕事、恋愛…。疑問や意見をぶつけ合い、語り合った。

「私は被害者Ａではない。伊藤詩織です」

性暴力を告発した女性に司法もメディアも味方ではなかった。闘い続けた勇気ある女性の記録。

全世界に広がった#MeToo、相次ぐ性暴力への無罪判決に対する怒りから始まったフラワーデモ、女性にだけ苦痛を伴う服装規定を強制することに反対する#KuToo など、女性たちが勇気をもって声をあげるようになってきた。同時に、これまで否定的なイメージで語られがちだったフェミニズムに対する関心も高まり、堂々とフェミニストを自称する若い女性も増えている。女優のエマ・ワトソンはその一人だ。彼女は UN Women の親善大使として、力強く、しかも優雅にジェンダー平等と女性のエンパワーメントを訴え続けている。

テーマ展示では 100 年に及ぶフェミニズムの歴史や理論を入門書や絵本も含めて展示した。そして、SNS を駆使したオンライン上の署名運動や、＃（ハッシュタグ）を使った問題意識の共有、花を手にして静かに訴えるデモなど、若者たちを中心とする多様なアクションに注目し、関連資料をビジュアルに展示している。〔yk〕

読んでみました

その名を暴け　#MeToo に火をつけたジャーナリストたちの闘い

Ｊ・カンター、Ｍ・トゥーイー著／新潮社　2020　：　原題　***SHE SAID***

アメリカを発祥地として全世界に広まった#MeToo 運動、それはニューヨークタイムスの二人の女性記者と編集部が総力を挙げてハリウッドの大物プロデューサー、ワインスタインの長年にわたる性暴力、セクハラの実態を暴いたことから始まった。その綿密な調査と被害を受けた女性たち（その中には誰もが知っている有名女優もいる）が、ハリウッドの"帝王"の名に抗して証言を承諾するまでの粘り強い働きかけは圧巻だ。結果、ワインスタインは禁固 23 年の実刑判決を受け服役中である。

これを機に世界各地で「私も」と声を上げる女性が続いたことは周知のとおりだ。しかしその一方で、女性を客体視する風潮、レイプ神話などの社会意識、男性優位の司法や制度などの壁は厚く、まだまだ性暴力との闘いは道半ばである。〔yk〕

次回展示のお知らせ　(2021 年 4～9 月)

テーマ　**女性とスポーツ**

女性スポーツの歴史や女性アスリートの持つ問題にジェンダーの視点で迫ります。JOC 会長問題で露呈されたスポーツ界の体質に注目が集まっている現在必見です！

シリーズ SDGs を知ろう（2）

持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals: SDGs）には17の目標がある。当紙91号に続き、今回取り上げるのは

目標６．安全な水とトイレを世界中に

私たちが住む日本は水の国、清潔な水が豊富で古来より大切にされてきた。水道の蛇口からいつでも水が手に入り、昨今は新型コロナウイルス感染症予防の効果的手段として水と石鹸での手洗いが励行されている。しかし世界には、手洗いをする設備が自宅にない人が30億人、そればかりか安全な飲み水が家にない人が22億人もいる。多くの場合、遠くまで水くみに行くのは女性や子どもで、そのため充分な教育を受けられない子どもも多い。トイレに関しても、日本では公共の場にさえ清潔なトイレが設置されているが、世界では約42億人が安全なトイレを使用しておらず、このうち6億7,300万人が屋外排泄をしている。不衛生な水とトイレが原因の下痢で命を落とす5歳未満児は年間約30万人、一日当たり800人以上にものぼる。

目標6の達成のため、水資源の管理、水質を守るための浄水、上下水道設備、生態系の保護、トイレの設置などが必要である。〔mh,af〕

参考：「知っていますか？SDGs ユニセフとめざす2030年のゴール」/さ・え・ら書房　2018.9
WHO/UNICEF JMP report, Progress on household drinking water, sanitation and hygiene

読んでみました

『天、共に在り』 アフガニスタン三十年の闘い
中村哲著 / NHK出版　2013.10

2019年12月、アフガニスタンで凶弾に倒れた医師の中村哲氏。彼ほどSDGs目標6の達成を体現した人はいない。本書は氏の生い立ち、キリスト教との出会い、医師を目指した経緯、そしてアフガニスタンでの活動が描かれる。氏の倫理観を作ったのは、母方の祖母マンの「弱者は率先して庇う」、「職業に貴賤なし」、「小さな生き物の生命も尊ぶこと」である。また、伯父で作家の火野葦平の戦後の苦悩も間近にみている。

中村哲氏は1983年から海外(パキスタン、後にアフガニスタン)での医療活動を始め、その活動を支援するため、氏の故郷・福岡に＜ペシャワール会＞が設立された。

氏が“水”と対峙するきっかけは、2000年春、中央アジア全体が未曾有の干ばつにさらされたことだ。氏の言葉「餓死とは空腹で死ぬのではない。栄養失調になり抵抗力が落ちたところへ、汚水を飲み、下痢などの腸管感染症にかかり落命するのである」は衝撃的である。そして犠牲者は圧倒的に子ども。これらは清潔な水さえあれば改善できることだ。「もはや病気治療どころではない」と氏は水源確保・治水事業へと活動をシフトし、医療活動と並行して現地スタッフと共に1,600カ所もの井戸を掘った。

もともとアフガニスタンは自給自足の農業国であり、農民と遊牧民の国であった。食料自給率は100%近い。農村の回復こそ健康と平和の基礎である、との思いから、2003年には「100の診療所より1本の用水路を」を合言葉に、灌漑用水路の建設工事に着手した。氏は、地元住民が重機に頼らず建設でき、補修、管理を恒久的にできるよう、故郷の筑後川に学び、蛇籠（じゃかご）工法、柳工法を取り入れた。こうして死の谷といわれたガンベリ砂漠に緑の大地がよみがえったのだ。［筆者注：現在、全長27キロに及ぶアーベ・マルワリード用水路（＝ペルシャ語で"真珠の水"）は農民65万人の生活を支えている。］　それだけではなく、氏は人々の拠り所であるモスクを造り、水争いを収めるなど、地元の人々から深く敬愛され、「解放と自由」の象徴となった。「天の時、地の利、人の和」があればやり遂げられる。まだまだ中村氏に教わりたかったと、その死が悼まれる。〔mh〕

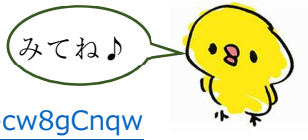
あれもこれもオンライン！

コロナ禍では NWEC 情報課が参加/主催のイベントもオンライン開催に　〔af〕

◇第 22 回**図書館総合展_ONLINE**　2020 年 11 月 1～30 日
「ポスターセッション」で 50 万件を突破した新聞記事クリッピングや自宅からでもご利用いただけるサービスについて紹介*
「図書館見学会_ONLINE」で情報センター案内動画を公開**

◇NWEC 主催「**アーカイブ保存修復研修**(基礎コース)」2020 年 11 月 19＆20 日
　Zoom 配信によるライブ配信＋YouTube によるオンデマンド配信
◇**図書館と県民のつどい埼玉**　2020 年 12 月会場開催中止～オンライン公開のみ
“本があるだけじゃない 図書館がわかる展示” で所蔵資料などをオンライン紹介

* https://2020.libraryfair.jp/poster/2020/p005
**https://2020.libraryfair.jp/online_tour/2020/8　または
NWEC Channel　https://www.youtube.com/channel/UCkzeiT_hVEttEP-cw8gCnqw



広報紙アーカイブについて

ボランティアによる数年前からの取り組み報告

私たち情報ボランティアは数年前からボランティア広報紙（『**女性教育情報センターだより**』と『**あんな本こんな本**』）のデジタルアーカイブ化に取り組んでいます。東日本大震災で大量の文書資料が失われたこと、NWEC のアーカイブ研修で記録保存と次世代への継承の重要性を学んだことがきっかけでした。広報紙は小さなものですが、NWEC ボランティアとして活動した女性たちのいわば「生きた証」です。40 年前に細々と手書きで始まり、今号でそれぞれ 92 号、84 号まで発行されてきました。これを簡単な目録とともにデジタルでアーカイブ化しています。

40 年間、先輩女性たちは時代の何を感じ、どの様な経験と知恵と努力で生活していたのでしょうか、またどんな本に興味を持ち、そこからエンパワーされていたのでしょうか。

この広報紙は当時の一般女性や主婦の目線で作成されたものです。しかし、現在の私たちにとっても先輩たちの足跡から学ぶことが多く、また女性史や女性学の基礎資料としても貴重なものではないかと考えています。しかし、著作権により、全文をすぐに一般公開することができないのが現状です。　〔yh〕

編集後記

☆部屋の窓から見えるのは毎日同じ景色。そんな「あたりまえ」の景色さえ２度と見ることができないフクシマの人たちのことを忘れないでと願います。〔af〕
☆コロナのせいで生活だけでなくものの見方も変わった。今まで重要だと思っていたことが相対化され、些細なことが大切に思えてくる。〔yk〕
☆コロナ禍のボランティア活動に思う。こちらも負けじと変異して活動します。〔mh〕
☆第三惑星の存在意義：平和なくして平等なく、平等なくして平和なし。　〔yh〕
☆震災から１０年。「もう」か「まだ」かは、それぞれの状況や心の中。そしてコロナ禍、初の web 発行、リモート会議。慣れない事ばかり。大切なことは何か、よく考えたい。〔co〕

＊本号で取り上げたテーマと関連する記事が９１号にも掲載されていますので、そちらもご覧ください。
http://id.nii.ac.jp/1243/00018881/